エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第２４０号

2022 年 4 月 1 日

編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三

電話　080-1232－0905

http://encounter.agape.wjg.jp

小西芳之助導源先生「コリント人への第１の手紙講解説教」より（１０）

教会はキリストの身体

もしからだ全体が目だとすれば、どこで聞くのか。もしからだ全体が耳だとすれば、どこでかぐのか。そこで神は御旨のままに、肢体をそれぞれ、からだに備えられたのである。…目は手にむかって「おまえはいらない」とは言えず、また頭は足に向かって、「お前はいらない」とも言えない。（コリントⅠ 12・17，21）

コリント前書第 12 章から 14 章までには、霊の問題を論じております。…本日は、その霊の賜物の性質を教会に当てはめ、教会とはキリストの体である、ということを論じた場所であります。パウロの教会論をなす、重要な箇所であり、パウロの専売特許と言ってもよいでしょう。「教会はキリストの体」ということは、パウロがこのコリント前書及びロマ書で展開しております。換言すれば、「教会というものは、キリストの受肉の延長である」ということでありま

す。パウロは更に、エペソ書及びコロサイ書において、「キリストは教会の頭である」ことを述べ、信者は、その頭を仰ぎ見ていることを述べました。この体は一つの体ではあるが、多くの肢体を持っており、それらが一つの有機体であり、生命であると言っています。かくの如く、教会においては、各自が異なった仕事、持ち場を持っていますが、それは一つの体、「教会」によって支えられていることを説きました。…我々一人一人が神から、異なる賜物を頂いていて、そしてそれがキリストの身体である教会の、一部分を成していると言うのであります。我々はこの原理がよく飲み込めていないために、他人をうらやみ、あるいは、軽蔑し、また自分に失望し、互いに争っています。

スズメに餌をやったことが天国へのパス

神は、小さき者を尊敬し、大切にしていることを述べました。これは誠に深い教えであると思います。……スコットランドの有名な牧師の説教の中で、次のような話しがあります。彼は自分が死んだ夢を見ました。天国に行ったら、そこにペテロが立っており、「天国へ入る証明書を出せ」と言ったそうあります。「私は多くの説教をしてきました」と答えたら、ペテロは「君の説教など天国で誰も聞いたことはない」と言いました。その牧師は、更に、「私は教会を建て、牧会で大きな活躍をしてきました」と付け加えましたが、ペテロは「そんなことは、天国で誰も聞いた者はいない」と答えたそうであります。そこで、牧師は非常に落胆した、そろそろ帰ろうとしました。その時、ペテロは「君、スズメに餌をやったことがあったかね」と聞きただしました。その牧師は「ああ、私はスズメに餌をやったことがあります」と答えた。ペテロは「そうか、スズメは我が主イエスが愛し給うたものである。それをお前は愛してくれたのだから、天国に入れてやる」と言ったそうであります。その牧師はやっと天国行きのパスをもらったわけであります。神のご計画は人間のものとは違います。我々の日々の仕事は神が与えたものであります。家の掃除、炊事は召使のような身分の低い者の仕事のように見えます。しかし、低い高いは神様が決めることであります。我々は教会の一員として、身分相応に自分の義務を果たそうではありませんか。

ゴスペル（福音）オンリー

本日のレッスンで、各人がそれぞれ違う賜物を受けていることを学びました。教会についてもそれぞれ違う機能を持っていると思います。先日、石館先生のところに豪州からお客様が来られた時の話です。先生は、私の前で、「この教会は、ゴスペル（福音）オンリーである」と言われました。その客はその意味がわからなかったようですが、その意味は、第１に「キリスト教の救いとはどういうものであるか」、そして、「その救いに入るにはどうすればよいか」、第３に、「その救いに入ったものはどのような生活をするのか」、この３つのことだけ説いている教会である、ということです。この３つが、福音の中心的課題であります。これがロマ書に書いてあります。もっと簡単に言えば、「キリスト教の救いとは、永遠不滅の生命を受けること」であります。「キリスト・イエスが持ち給う命を自分のものとすること」であります。これ以外をキリスト教では、「救い」（ソーテリア）とは言いません。我々の肉体は滅びます。しかし、この滅びゆく肉体の中へこの「永遠の生命」をもらう。他の言葉では、「神の子とせられる」「信仰によって義とせられる」などとも言いますが、みな同じことであります。

救いとは、キリストの持ち給う永遠の命をもらうこと

この第１の根本問題ががっちり分かっていない人が多い。救いとは、人間がキリストの持ち給う永遠の生命をもらうことですが、それが分かっていない。第２の問題、救われるためにはどうすればよいかと言えば、人間の如何なる行為、その他如何なる心の状態をも必要とせず、ただ、イエス・キリストが十字架にかかって、我々のすべての罪を贖って下さり、我々に永遠の生命を与えて下されたということを信じること、その力を受けることだけで救われることです。そして最後の問題、この世ではどうするかという問題は、天国の復活をめがけて目の前に与えられた仕事をなすことです。

皆さんとともに、復活にあずかりたい

以上が、当教会が主張するところの内容であり、また、特殊使命であります。「善行せよ」というようなことは、どの宗教でも勧めています。しかし、この善行をする力がないことが問題です。この力は、今述べた福音を受け入れることから出てきます。当教会がキリスト教団に属し、世界の教会に属し、福音の伝道を行なっている理由がここにあります。私は、そういう力のある人がこの教会から出て欲しいと願っています。自分に与えられたことは、如何に他人から言われても、またたとえ月給が少なくとも、自分の仕事を誠心誠意、死ぬまでやる、そういう人が出て欲しいと思います。教会を建てたり、多くの信者を養成したりすることは、必ずしも伝道とは言えません。天国を証明する者、これを伝道者と呼びます。即ち、その人を見たら、天国、即ち、永遠の生命が分かるというような人です。大半の人は、信者を見て、キリスト教から逃げ出してしまいます。我々は人にクリスチャンである、善人と言われなくてもよい。ただ、永遠不滅の命、復活を目当てに、毎日毎日与えられる仕事をがんばってやり通せばよいのであります。

私の願いは、皆さんと共に天国に行き、共に復活にあずかりたい、そのことだけであります。

コリント前書第 13 章の「愛」

コリント前書第 13 章は、聖書の中でも最も有名な、最も愛されている箇所の一つでありますが、誠に、注解をするのに最も困難な場所でもあります。ここには「愛」のことが論じられているからであります。日本では、祖先は論語をよく読んで参りましたが、学者は、論語は「仁」について書かれていると申します。昔から「論語読みの論語知らず」と言われている通りに、その「仁」の精神を体得することは極めて難しい。それと同様、キリスト教は「愛」に尽きておりますが、この「愛」を本当に解する人は誠に寥々として、雨夜の星の如しと言っても過言ではないと思います。この「愛」というのは、英国のマサット先生の立派な著書がり、また有名なニーグレンのアガペーとエロスに関する論文が出版されて以来、ここでパウロが「愛」と言っている内容が明らかになりました、従ってわれわれ信者は、この「愛」を体得できなくてもよいが、少なくとも「愛」とはどういう意味であるかを知っておく必要があると思います。

アガペー

ここで言う「愛」は原語で「アガペー」と申します。適当な字がないため、日本語では、「愛」、英語では「love」という一字で現わされています。Authorized Versionでは「charity」などという言葉も使ったこともありました。しかし、これでは意味が違うということで、また「love」に戻したようであります。適切な字がないことからこのような問題が出て来ますので、私は「アガペー」という言語で書いた方がよいように思います。そうでないと、どうも「愛」というと、我々の持っている「愛」と混同してしまいます。ギリシヤ語では「愛」をはっきり3種類に区別いたしまして、ここで論じているものは「アガペー」であり、これはイエス・キリストにおいて現れたる愛であります。これは人間が生まれつき持っている愛とは違います。親子、兄弟、友人愛は、「フィルス」や、男女間の恋愛、愛すべきものを愛するという愛「エロス」とは別のものです。これは分かりきったことですが、我々ははっきり知る必要があります。キリスト教で言う「愛」は「アガペー」です。私はこの「アガペー」を「キリストの持ち給う永遠の命」と置き換えてもよいと思います。こうすると誤解が少ないように思います。

愛がなければ一切は無益である

たといわたしが、人々の言葉や御使いたちの言葉を語っても、もし愛がなければ、わたしは、やかましい鐘やにょう鉢と同じである。たといまた、わたしに預言をする力が有り、あらゆる奥義とあらゆる知識とに通じていても、また、山を移すほどの強い信仰があっても、もし愛がなければ、わたしは無に等しい。たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分の身体を焼かれるために渡しても、もし愛がなければ、一切は無益である。（コリントⅠ　13・1―3）

ギリシア人は知恵を求め、ローマ人は力を求めました。あらゆる知恵、あらゆる力、人間のもてるすべてのもの、最高のものも、愛がなければ一切は無益である、と。これらはこの世では有益です。しかし、最後に述べられている如く、これには永続性がありません。永遠性のあるアガペーに比べれば、無益であるという。パウロは、この世の麗しきものすべてを糞土のごとく思うと言いました。それと同じことです。この世で少しでも善行したら、人は崇めるでしょう。この世では、善行の多い方が有益でしょう。しかし、それらは永遠の命と比べれば、無に等しいという。パウロの精神がここに出ています。

愛の性質

愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、無作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。（コリントⅠ13・4-7）

これは「愛の性質」であります。当時のコリントの人々はこれらの愛に欠けておりました。この愛の反対は、自己を重大にする、自己を見せびらかす、他人を考慮しない、などでしょう。生まれつきの人間は、愛がないから、この愛の反対の状態にあります。従って、愛の性質は自分と反対であると見たらよい。パウロの創設したコリント教会においてすらこの「愛」がなかった。永遠の生命を持っていなかったのであります。如何にこの「愛」がざらにあるものでないかが分かります。自分と反対のことがここに書かれているので、何回ここを読んでも自分のためにならないわけです。私は「愛」というものを如何に自分のものとするかにかかっていると思います。

アガペーについてのヨハネ第１の手紙の説明

信仰とは、神のアガペーを信ずることであります。アガペーはどこにあるかと言えば、ヨハネの第１の手紙、第４章７－11節にあります。即ち、

「愛する者たちよ。わたしたちは互いに愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。すべて愛する者は、神から生まれた者であって、神を知っている。愛さない者は、神を知らない。神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛するものたちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互いに愛し合うべきである。」

ここに最も明瞭に書かれています。ここをよく読んで下さい。

「信・望」に支えられながら「アガペー」を

キリスト教のアガペー。人類が生まれつき持っていないものがイエス・キリストにおいて現れたという。永遠の生命はイエス・キリストによって現れました。新しく人類に現れたのであります。これを「福音」と言います。値なき者に永遠の生命を下さった。これを「アガペー」と言い、これを信ずること、受けることを「信仰」という。この「信仰」は「山を動かすほどの信仰」とは違う。アガペーを信ずることです。ここから我々の復活させて頂くという「望み」が出て来ます。この「信」「望」に支えられた生活が外へ現れることを「愛」と言います。そうですから、このアガペーというのは、心と情と意志とが外へ現れた有様で有ります。神のアガペーを信じ、永遠の生命を持ち、そして、復活するという望みを持っている人間の心の有様を「愛、アガペー」と言います。従って「信・望・愛」は一つの永遠の生命です。これは、いくら説明しても言葉では説明しきれません。聖霊降って初めて我々が理解することであります。人の能力はみな違います。しかし、この「アガペー」は万人共通であります。我々は、この世で朽ちるべきことに全力を尽くしておりますが、この朽ちるべからざるものに対して分に応じた努力を行ない、この「アガペー」、「永遠の生命」を自分のものとして、明日から自分の前に与えられる仕事に励みましょう。「信・望」に支えられながら「アガペー」を自分のものにしようではありませんか。